

説教 『聖霊が降る所』 山本 護牧師  
聖書 出エジプト記 19：16～19／使徒言行録 2：1～4

聖霊降臨が起こったのは五旬祭の日(使徒 2:1)。五旬祭とは、過越祭から数えて 50 日目の祝祭日で、収穫感謝と同時に、遠い昔に十戒を授かったことを思い起こす日。過越祭がイスラエルの誕生日であるならば、五旬祭は「十戒(律法)」を授与されて民のアイデンティティが形成された記念日である。

モーセが十戒を授けられる時、「シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた(出エジプト 19:18)」。「火」は神が臨在される徴である。「雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた(19:16)」。「雷鳴や角笛」は、神が臨在して民を激しく揺さぶる響きだ。その重大な「歴史」を想起させる五旬祭に、イエスの復活によって集められた雑多な者(使徒 1:13~14)に聖霊が降った。

「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた(2:2)」。人間の期待や予測を裏切るように「突然」、風(霊)は激しい轟音によって彼らの耳を「支配」した。「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった(2:3)」。「舌」は彼らの言葉を「支配」し、「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した(2:4)」。

激しい風(霊)を受けるのは「一同(2:1,3)」であると同時に「一人一人(2:3)」だ。集団か個人かのどちらか一方なら話は簡単だが、使徒言行録は慎重に「群にして個／個にして群」であることを示す。人称や単複が厳密な原典では、「炎」は単数、「舌」は複数に書き分けられている。雑多な者たちがその人自身でありながら、一つになって「心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」ことは意味深い。語る「舌」は各々の言葉でありながら、同時に彼らの狭いエゴに納まりきらない「一同(2:4)」のものでもある。逆に言えば、一同としてある「炎」によって、聖霊に満たされた一人ひとりが「ほかの国々の言葉で話した(2:4)」。「個にして群／群にして個」は何を示唆しているのか。

つまりこうではないか。価値観や生き方まで強制される「一同だけの教会」には聖霊の降臨はない。逆にまた、馴染んだ個々に留まる「一人一人の教会」にも聖霊は降臨しない。聖霊は、雑多な者が、雑多な姿のままに、「心を合せて熱心に祈っている(1:14)」所にこそ降る。炎(単数)は、各々の舌(複数)となって「一人一人の上にとどまり(2:3)」、「ほかの国々の言葉で話し出す(2:4)」。「舌」は私自身は、私自身の言葉を得、他者と比較できない私の真実(国々の言葉)を表明する。洗礼(過越祭)によって新たに生まれた私たちは、やがて聖霊に満たされて(五旬祭)、恵みと救いの、多様な証人の一人となる。

復活したイエスは、「あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられる(1:5)」と告げ、「エルサレムを離れず～父の約束されたものを待ちなさい(1:4)」と命じた。彼らは言いつけ通りに待ち(1:12)、皆共に心を合わせて祈っていた(1:14)。共に祈る弟子や女たちは、聖霊を受けて自らの言葉で語る主体となった。私たちも「聞く」時には受動的の者だが、聖霊を受けて能動的キリストの「舌」となる。



《おまけのひとこと》

価値を共有し合う二人称関係だけでは 私は「あなた」に吸収されるだろう そこでは三人称もあなたと私に吸収される 確かな一人称であるためには 吸収されえない教会という三人称が必要